

朝のボランティアの輪が広がっています。学校に来るのが楽しみで小がありません。

上手に加減をする

先日、にれのきタイムを実施しました。縦割り班での朝遊び活動です。本年度、榎木小では縦割り班で様々な活動(掃除やボランティアなど)を行っていますが、今回は遊びバージョンという感じです。



みんな楽しそうに遊んでいる姿が印象的なのですが、特に高学年のお子さんの動きがいつもの学級遊びとは違うようです。なんだか、ちょっと緩い。本気を出していないように思えるんだけど。



ボールも緩い、走りも緩い、ルールも少々緩い。なんだか力を抜いている(子どもの言葉で軽気というそうです)ようにも見えます。普通なら、遊びだからって力を抜いたら楽しくなくなるので、雰囲気かどよんとしてしまいそうなどころですが…なぜかみんな笑顔。特に、1年生のお子さんの笑顔がはじけています。

もうお気づきの方が多いと思いますが、高学年のお子さんが、低学年(特に1年生)のお子さんに合わせて加減をしてくれているからですね。この“加減”をするという活動は、非常に難しいものです。弱すぎると楽しくなくなるし、自尊心を傷つけられるのでむしろ恨みが募ります。逆に強すぎると一緒に遊べなくなる。

この絶妙な加減が、昔(私たちが小さいころ)はいたるところで見られていたような気がします。放課後、近くの海岸で近所の友達(それこそ幼稚園から高校生まで)と一緒に遊ぶという光景を思い出します。高校生のお兄ちゃんたちは、いろんなところから木切れを集め、船をつくってしまい、対岸まで遊泳。楽しそうだなと小学生が近づいていくと、お兄ちゃんたちは「危ない」ことがわかっているから、自作の船に乗せてあげるんだけど、浅いところだけをゆらりゆらり。少々のけがや心配なことはあるんだけど、一線は越えない。年長者が上手に守ってくれるんです、これが。そのような経験をした年少の子どもたちも、上手に加減する塩梅を経験的に獲得していく。だから、命を奪うような大きなけがをせずにすんでいたのだと思います。

もちろん、今、こんな危なそうな遊びを推奨しているわけではありません。ただ、昔も今も、上手に加減する塩梅は、小さいときにぜひ身につけておきたい。残念ながら、最近のニュースには、この加減を知らず、相手の命までも奪ってしまう事件が見られます。特に、いじめに代表される相手の尊厳を傷つける行為は、絶対にあってははいけません。「やりすぎた」では済まないことが、世の中にはたくさんあることを、私は絶対に学ぶべきだと、そう思うのです。

だから、上手に加減をするこのような経験は、必要不可欠だと、私は思います。

縦割り班活動の中で、低学年がこれほど安心して遊びに没頭できている理由は、間違えなく高学年の上手な加減のおかげです。そして、縦割り班のような“自分とは違う年代や体格をもつ集団でのかかわりあい”の中で、この上手な加減を、低学年のお子さんも体感的に獲得していくのだろうな、と。優しさを帯びた榎木っ子たちの、縦割り班を通じたかかわりあいに素敵なたくましさを感じた次第です。